「翻訳という創造空間」総合文化研究所シンポジウム

報告　山口裕之

総合文化研究所では、この3年間、「文学の移動／移動の文学」及び「翻訳を考える」と題した一連のイベントを開催してきた。これらの企画には、「外部」に出ることによって「異質なもの」「他者」と対峙するときに働いている、広い意味での政治的な力学を、「文学」・「翻訳」の場において具体的対象に即しながら考えていきたいという共通の関心がある。

十一月二十九日に開催されたシンポジウム「翻訳という創造空間」では、きわめて精力的な翻訳活動・執筆活動を展開している柴田元幸氏（東京大学名誉教授・アメリカ文学）、野崎歓氏（東京大学、フランス文学）、松永美穂氏（早稲田大学・ドイツ文学）、和田忠彦氏（東京外国語大学名誉教授・イタリア文学）の四人の翻訳者／研究者をパネリストに迎えて、それぞれ翻訳についての考え方を話していただいた。またコメンテーターとして所員の沼野恭子氏（ロシア文学）に加わっていただき、山口裕之（ドイツ文学）が司会を担当した。会場となった一一五教室は二〇〇名近い参加者でほぼ満員となった。

今回のシンポジウムでは、「翻訳」の問題を理論化・概念化された考察だけに回収するのではなく、きわめて実際的な営みとその視点に即しながら、理論との関係を問い直すということに眼目を置いていたため、パネリストの方々にはあらかじめ以下のような問いを投げかけていた。

・翻訳の実践の場において、「翻訳理論」はどのような意味をもつのか（あるいはもたないのか）
・翻訳者は、翻訳の場で「翻訳理論」をどのようなかたちで意識するのか（しないのか）
・「翻訳理論」は、翻訳の実践に対してどのようなかたちで有効に機能するのか（しないのか）

これだけの顔ぶれの翻訳者が集まって話をするので、翻訳の際にどのようなことを考えているのか、どのように翻訳をしているのか、ということを話してもらうだけで十分に興味深いのだが、そこにコンセプト上の収束点として「翻訳理論」を持ち込みたいと考えていたということだ。

人文研究において、「理論」というのはしばしば「実践」のための道具などではなく、むしろ思想的立場そのものを意味する。翻訳は、本来きわめて実践的な行為であるが、トランスレーション・スタディーズはその成立以来、基本的に実践的方法論ではない方向へと傾斜してきた。翻訳者が、実際に翻訳の作業を行うときにある特定の理論に依拠して翻訳を行うということはあまりないとも思われるのだが、それでも翻訳実践の場において理論的言説がどのように関わるものとなっているのかを、パネリストの翻訳者たちの具体的な翻訳の場に即して、あ

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

るいは翻訳に関わる教育の場（翻訳実践演習・翻訳理論講義など）が自分自身の翻訳にどのように作用しているかという経験に即して話していただくことは、きわめて興味深いことである。このシンポジウムは、そのような関心に基づいて行われたものだった。

最初のパネリストである柴田元幸氏は、James Robertson の短編小説 Inadequacy of Translation への言及から話を始めた。柴田氏は、翻訳はつねに不完全であり、原理的には不可能であることを十分に認めつつも、「同じ負けでも一〇対〇ではなく、一〇対九」であることを意識した翻訳を念頭に置いているという。つまり、nothing is translatable ではなく、everything is translatable であると積極的に考えるという、いわば「楽観的」な翻訳の立場が氏の考え方の基調となっている。

二番目に話していただいた野崎歓氏も、翻訳は楽天的でなくてはできないのではないかと切り出した。野崎氏は、翻訳したいという欲求には、何かをコピー・反復して模倣したいという欲望がその根底にあると指摘する。野崎氏は、社会学者の創始者の一人とみなされている一九世紀のガブリエル・タルドの『模倣の法則』に言及し、その思想をさらに敷衍することによって、自己から解放としての「翻訳欲動」に身を任せることによって、「芸術」という船が進んでゆくのではないかと語った。

松永美穂氏は、これまで翻訳における「わかりやすさ」ということが翻訳の実践においても、教育活動においても重要な位置を占めてきたことを強調した。トランスレーション・スタディーズの理論そのものは、翻訳実践から切り離されたところで展開されてきたという側面があるが、そういった理論を後から知ることによって、自分自身の翻訳実践を確認することもあったという。また、作家の多和田葉子氏の翻訳や言葉に対する考え方から大きな刺激を受けていると語った。多和田氏は、一種の自己翻訳やいわば生産的誤変換とでもいうような言葉遊びをしばしば行なっているが、そこには、われわれが言語を操っているのではなく、私たちが言語に使われているという考え方が根底にある。松永氏の翻訳に対する考え方にも通じているのだと思われる。

和田忠彦氏は、翻訳に関わる自分自身の体験の根底に「音」「声」があることを強調する。翻訳として現れている言葉の違いには、聞こえている「音」や「声」が違うのではないかと考え、自分自身が聞き取っている音を日本語にするとどうなるのだろうという思いが和田氏の出発点にあったという。翻訳という場は、和田氏にとっては、ちょうど自由間接話法が登場人物と語り手の声を二重化させているように、翻訳者は物語の主人公（タブッキの『時は老いを急ぐ』の主人公は物語そのものである）に寄り添うようにして翻訳に立ち会っている。「翻訳の賞味期限」と言われているものについても、できるだけ長く読まれる言葉をあみだしたいという思いを持つと同時に、長く保つことのできる言葉のために窮屈な選択を迫られるときもある。そこで天秤にかけるのは、自分に響いている音、リズム、視覚的なものであるという。

四人のパネリストの発言のあと、コメンテーターの沼野氏からは、パネリストに対する個別の質問とともに、翻訳 interpretation が音楽の演奏や舞台の上での俳優の演技と似たような特質をもつものであることについて指摘があった。それとも

に、翻訳は母語を豊かにする可能性をもつものであり、翻訳理論そのものについても、これまでの翻訳理論が完全に欧米的な思考の枠組みにおいて形成されてきたものであって、日本語に即した理論の必要性があらためて強調された。

シンポジウム全体を通じて、トランスレーション・スタディーズの理論そのものに対して、実践の場から発言を行うという方向に議論が収束してゆくのではなく、むしろこれまでの翻訳活動のなかで考えていることを自由に語るという場になったが、そのことはおそらく翻訳という行為の実際的なあり方を象徴的に表していたとも言える。コメンテーターも含め、壇上で発言された方たちは、クリエイティブであることをことさらに語ることはなかったのだが、語られていることのそれぞれが翻訳の創造性に結びついていくものであったという印象を強く受けた。

＊　なお、このシンポジウムの抄録が『世界』二〇一八年三月号（岩波書店）に掲載される予定である。

総合文化研究所主催シンポジウム「翻訳という創造空間」

二〇一七年十一月二十九日（水）

パネリスト：

柴田元幸（東京大学名誉教授・アメリカ文学）

松永美穂（早稲田大学・ドイツ文学）

野崎　歓（東京大学・フランス文学）

和田忠彦（東京外国語大学名誉教授・イタリア文学）

コメンテーター：

沼野恭子（東京外国語大学・ロシア文学）

司会：

山口裕之（東京外国語大学・ドイツ文学）